

【論 文】

反社会的行動という行動化の背景にある身体

—教育臨床における心理臨床学の視座—

桑原晴子

(岡山大学大学院教育学研究科)

本論文では反社会的行動という形で行動化をする少年達との関わりにおいて、少年達が主体的に生きている「からだ」に着目することが、その行動化の意味を考え、心理臨床的關係を続ける上で意義を持つことを、事例を通して検討を行った。行動化を中心とする少年たちに合った心理臨床のあり方を考えるためには、Kawai (2006)による意識の変化という視点が有効であり、内面が欠如するポストモダンの意識を持つ少年との間では、クライアントの表面の身体への関心が「關係性を育む器」となる。またスクールカウンセラーが生きているからだを關係性の中で差し出すことが、主体の生成する場としての機能を持つとともに、クライアント自身のからだへの関心だけでなく、スクールカウンセラーが自らのからだを通して、行動化の体験をイメージするところの作業がクライアント理解を深める上で非常に重要になると考えられた。

キーワード：からだ, 行動化, 反社会的行動, 教育臨床, ポストモダンの意識

1. はじめに

スクールカウンセラーとして学校の場に身を置くと、休憩時間になると毎時間のように養護教諭の元を訪れ、頭痛や腹痛、熱感、手足の痛み、吐き気などの身体症状を訴える子どもたちの多さを目の当たりにし、子ども達にとってのこころと身体の不可分さを改めて実感することになる。神経症レベルの不登校の子どもが学校を休み始める初期にこれらの身体症状を訴えることが典型例としてよく挙げられる(桑原, 1999)が、教室に入り一見何の問題もないかのように日常を過ごしている子どもたちもまた、頻繁に身体の痛みや違和感を訴え、他者による関わりを求めている。このように身体的なものは、学校における心理臨床実践においては不可欠な視点であり、こころとからだの關係をどのように捉えるかについて自分なりの考えを深めておくことは、教育臨床に携わる心理

臨床家にとっての必要条件といえるだろう。

身体を通して、生きる上での困難を表現することを「身体化」というが、人間の苦しみの表現型として、大まかに①心理化(もしくは精神化)、②身体化、③行動化の3つの視点から捉えることは、心理臨床学の基本的視座の一つと考えられる。新しくクライアントに出会うとき、その人の生き難さがどのレベルで表現されているのかを見立てる作業は必須であり、この3つの表現型のいずれが前景化するかは、その個人にとって、その時々で最も適したものとなることが多い。またこれら3つの表現型は決して分離独立したものではなく、相互が密接に関連しており、時には身体症状が先鋭化し、その身体症状が消長する頃に行動化が生じるなど、心理療法のプロセスの中で複雑に絡み合い、変化していく。

この身体とともに近年の教育臨床において重要

な視点として、③の行動化を忘れることはできない。今日の学校はいじめ、暴力や自傷、摂食障害、性的逸脱、薬物乱用など、様々な行動レベルの問題が噴出しているが、行動化を中心とする子どもたちが以前よりも増えているという指摘がなされている(岩宮、2000)。例えば学校臨床で最も中心的な問題と見なされる不登校に限定してみても、従来は優等生の息切れ型など、「学校に行きたいけれど行けない」といった葛藤を持つ、いわば「心理化」を主とする神経症レベルの事例が中心だったのに対し、近年では葛藤が明確になりにくい事例が増えているという(桑原、2000)。またそのように何らかの明確な問題として焦点化されていない場合でも、学校の日常生活の中で何か問題が起きたとき、教師が反省を促す指導をしても、本人は罪悪感を感じておらず、その指導が根づかず問題が反復され、それゆえに教師が対応に苦慮したり徒労感を抱いたりする場合も稀な事態ではない。こころの苦しみがあればこれかという葛藤という形にはならず、つまり「①心理化」されずに、衝動的な行動として「③行動化」する子どもたちとどのように関わるかは、近年の教育臨床における切実な課題であるといえよう。

このように身体と行動化は教育臨床において不可分なテーマであり、両者の関係性について論考を深めることが重要であるが、どちらも非常に幅の広い概念のため、先行研究を概観すると十分な議論が尽くされているとはいいがたい。身体については、Jung(1988)の「身体的無意識」という言葉が示唆するように、言語化・意識化を前提とする質問紙法などの研究方法では掬いがたい面があり、臨床事例をもとにし、丁寧な検討を積み重ねていくことが必要であろう。よって本論では、行動化の中でも、学校現場でよく出会う「反社会的行動」の形で行動化を行う少年たちと関わりを取り上げ、その行動化の背景にある身体の様相に着目し、行動化の意味の検討を行うこととする。

2. 反社会的行動の背景にある身体—「からだ」という視点

教育臨床における行動化としてまず思い浮かぶ「非行」あるいは「反社会的行動」についての心理臨床学的研究としては、事例を通して不安や孤独感などの観点から論考したもの(廣井(2000):東(2001)他)、コンサルテーションなど学校臨床特有の実践のあり方について検討したもの(村山・滝口他、2007)などは数多いが、本論のテーマである身体という視座との関連からはあまり論じられていない。身体と関連付けた先行研究を概観すると、非行行為と心身症の関連を示唆した十河・末松(1989)の研究や、非行・反社会的傾向と自傷行為との関連を論じた門本(2006)の研究などが散見される程度である。しかし、これらの先行研究は、非行少年の身体に何らかの「症状」として問題が現れた場合を扱ったものであり、日常の臨床の場で出会う、症状化以前の「本人が主体的に生きている『からだ』」(河合、2003)については十分に検討されていない。しかし実際の臨床実践における関わりで重要になるのは、症状そのものというよりも、この河合が指摘する意味でその人が生きている「からだ」だと考えられる。

また、その他の反社会的行動についての先行研究として、非行傾向の生徒のグループ・コラージュについて検討した西村(2006)の研究では、コラージュに表現される性的・身体的内容を取り上げ、「身体イメージの変化、異性との出会いなど混乱や不安」を表現したものとして論考している。これはその生徒たちが生きている「からだ」そのものではなく、イメージ内容の一部として表現された身体に着目したものである点で本論の関心とは異なる。さらに行動化における身体的なものが持つ意味は、西村が指摘する身体イメージの変化や異性との出会いに伴う混乱や不安以外にも、より豊かな意味を持つと考えられる。

以上のように先行研究においては、少年達と出会う臨床的関係性の中において、彼らが生きてい

る「からだ」がどのような意味を持つか、さらにその心理臨床の場で立ち現れる「からだ」が、関わりの中でいかに生かされていくかという点についてはほとんど論じられていないといえる。

ここで、本論での中心となる「からだ」という心理臨床学の視座は、心と体の関係に関する、次のような河合(2003)の指摘に基づくものである。河合によると、「人間存在という『高次の実在』としての次元においては『心身一如』なのだが、私たちが心理療法で関わる場合には、「この『高次の実在』そのものに直接接することはできない」ため、「心の側か、体の側から接近するしかない」。しかし、同時に「心身一如的な高次元の存在である人間と言うものが存在していることは忘れてはならない」。そして心理療法においては、「本人にとって客体として見られる「体」ではなく、「本人が主体的に生きている「からだ」を対象とするのだという。この河合の言葉は、反社会的行動を中心とする少年たちと出会う時に、暴力、窃盗や暴走行為など、表面的な行動化の内容にどうしても目を奪われてしまい、そこで息づいている少年が生きている「からだ」に対する注目が疎かになりがちなことへの戒めともなると考えられる。大切なのは、その行動化をその少年たちがいかに生きているかであり、からだはその指標ともなる。よって反社会的行動という行動化で自らを表現している少年の「からだ」に着目することは、その少年の「心身一如的な」全体存在としてのありように目を向け、その行動化の心理的意味を理解する契機となると考えられる。

3. 現代の学校における行動化の背景—意識のあり方の変化

教育臨床において行動化を中心とする子ども達が増加している現状を踏まえ、その背景について考えてみよう。子ども達の変化というと、現代の家庭環境や社会環境の変化など、いわゆる「心理社会的」な観点から、外的なものとの関連を論考

するものはよく見受けられ、その視点も非常に重要であるが、同時により心理学的な変化について検討しておくことも肝要であろう。その際、心理的なものの根本を成す意識のありようの変化について論じ、現代の意識性が、内的葛藤を主とする「modern consciousness」、すなわち近代意識から変化しつつあると指摘する Kawai (2006) の論考が参考になる。Kawai によると、本来近代意識の本質とは、共同体、アニミズム的な自然や無意識からの解放にあり、内的葛藤と関連するため、神経症や心理療法と密接に関わる。それに対し、今日の社会においては、葛藤の感情を持たず、解離や行動化によって特徴付けられる事例が増加しつつあるが、それは「postmodern consciousness」、ポストモダンの意識への変化によるものだという。

それでは、その Kawai(2006)のいうポストモダンの意識の本質とはどのようなものなのか。それは対象へのこだわりのなさ、上下やこちらとあちらといった前近代的なコスモロジーや近代的な内面性の欠如であり、「表面 cosmetic」だけが存在し、内容がない自己内省 (self reflection) である。そしてこのようなポストモダンの意識は決して未熟や病的なものとして理解されるべきではなく、このポストモダンの意識を深めていくことが大切だという。

以上のような Kawai(2006)による意識性の変化に関する指摘は、現代の学校臨床の場に身を置いた心理臨床家であれば、首肯するところが多いのではないだろうか。特に、反社会的行動で行動化する子どもたちは、このポストモダンの意識の特徴を顕著に表わしている。また、この Kawai の論の注目すべき点は、このポストモダンの意識そのものを否定的な変化として捉えるのではなく、その変化をしっかりと見ていこうとする点である。従来心理臨床学の領域で行動化というと、どうしても未熟なものという印象があり、行動化ではなく、こころの苦悩を意識化させて、という関わりを目指してしまいがちになるけれども、このよう

に意識のありようが変化していると考えれば、現代の学校現場における困難は、意識の変化に伴う必然的な苦悩として捉えることが可能になる。そして、人間存在の意識そのものの変化が行動化する子ども達の増加の背景にあるのであれば、学校現場で噴出する様々な行動化の原因を、子ども本人の心理的問題や、教師個人の力量、個々の家庭環境などの問題に単純に還元させるのではなく、そのポストモダンの意識を持つ子ども達の間では新たな関わり方が必要なのは当然であるとの立場から、その関わりを模索していくことが可能になるのではないだろうか。

4. ポストモダンの意識を持つ反社会的行動化傾向の少年たちとの関わりー「からだ」という窓口

スクールカウンセラーとして、そのようなポストモダンの意識をもち、反社会的行動を繰り返す生徒たちと関わる際には、Kawai (2006) の指摘からも推測されるとおり、従来の心理療法の相談室モデルは通用しない。その生徒たちが学校に來た時、校内を徘徊したり別室指導を受けたりしている時に、こちらから積極的に顔を出し、関係をつなぎながら、必要に応じて適宜関わりを深めていくことが中心になる。なぜなら、本人たちは、自らの悩みを葛藤として抱え、すなわち「心理化」し、言語レベルでとらえることが難しく、自発的に相談室に來室することは稀なためである。スクールカウンセラーが積極的に相手のところに向き、「御用聞き」をして回るのは、学校臨床の基本的スタンスのひとつともいえると思うが、反社会的行動とみなされる行動化を中心とする生徒達との関わりでは、特にこちらから出向いて関係を築いていく姿勢が必要になる。その時の印象として、感情に焦点付けた問いかけなど、スクールカウンセラーからの言葉での働きかけは侵襲的にとらえられやすいようである。その背景として、学校という場は、教科学習をはじめ、言葉の優位性が強い世界であり、早期から学力的問題を抱え、自身

の居場所を感じられてこなかった彼らの傷つきも関係しているのだろう。言語化を求めることは、「内面」を持つこと、すなわち心理化を強いることであり、現在の少年達のありようを否定することにもつながる。内面性が欠如するからこそ行動化という表現を用いている彼らと出会っていくためには、より適切な、彼らに合った窓口をスクールカウンセラーを持つことが必要になる。その窓口として、非行という行動化の背景に息づくその子が生きている「からだ」(河合、2003)は有意義であり、からだに着目することを通して、表面的に「問題」としてとらえられがちな行動化の心理学的な意味を感じ取ることができるのではないだろうか。言葉の内容を追ってはい空疎な感覚が生じてつかみどころがないと感じてしまう場合であっても、からだへ関心を向けることでより手ごたえを感じながら関わりを重ねていくことができるのではないだろうか。確かにそのような関わり積み重ねをしたからといって、行動化が収まるといった単純なものでは決してないが、一瞬一瞬の出会いの中で、目まぐるしく繰り返される多様な行動化に目を奪われるのではなく、その行動化を通して、そのからだを生きている全体的存在としての少年は、何を実現し、どのように生きようとしているのか、という目的論的な視点からプロセスを見守ることが可能になると考えられる。

5. 事例

それでは、以下に事例を通して、反社会的行動という行動化が持つ意味と、その少年たちとの関わり方の在り方について、その少年たちが生きている「からだ」の次元に焦点を当て、検討を行っていく。なお、本論では、個人情報に関わる内容は一切掲載していない点のご了承をお願いしたい。

事例1

A は中学校では教室に入らず、学校に來ると仲間と徘徊し、学校内外において様々な行動化をしていた。普段は肩をいからせ、力が全身に入って

いるとともに、空回りしているように落ち着きがなく、1か所に定位できない印象があった。仲間といるときのスクールカウンセラーの声かけに対しては「うるさい、キモイ、意味不明、あっちいけ」など、まだ甲高さの残るアンバランスな声でドスを利かせ、そっけない返答を繰り返すことが多かった。ある日別室にいるAの刺青に気づき、<刺青、入れたんやなあ>と声をかけると、いかに刺青を入れたのか、それがどれほど痛いかについては、自発的に目を輝かせながら詳細に語った。「麻酔をせずにした。自分でもした。針めっちゃ刺す」と語るAに、<それは痛かっただろうなあ>とSCがその痛みを想像して身震いしながらこたえと、「痛い。K(SCのあだ名)は無理」と誇らしげであった。そのとき、Aのからだは腰がしっかりと座り、からだの軸がずっと通った印象を受けた。<怖くなかった?>という問いかけには、「別に」と答え、怖さという感情はAにとってあまり実感がないようであった。そして刺青は仲間たちも一緒に入れたことをうれしそうに教えてくれた。

事例1の考察

Aとの関係作りでは、刺青を入れる体験への関心が関わり糸口になっているが、行動化をする生徒たちと出会う上で、刺青やピアスに関する話題が格好の窓口になる場合がよくある。中学校の現場ではピアスや刺青はいわゆる生徒指導の対象として、いわば否定されるべき行為として捉えられがちであるが、スクールカウンセラーは、そのピアスや刺青という体験がその生徒にとってどのような心理学的な意味をもつか、そこに何を求めているのかという視点を大切にしなければならない。岩宮(2003)は、思春期において「外殻としての顔や身体が何よりも重大な関心ごとになっているのは、それが自分の本質だと捉えられて」いるからだと指摘する。そのため外殻の変化を指導しても、それは思春期の彼らにとっては自分の本質を変えるよう迫られていることになり、それほ

ど事が単純に進まないのは当然だという。この岩宮の論を踏まえると、スクールカウンセラーがポストモダンな意識をもつ彼らにとって「意味不明」で「キモイ」内面への問いかけをするよりも、彼らが生きているからだの表面に、例えば刺青やピアスに焦点を当てて関わるということは、彼らの存在そのもの、その本質に関心を持つことに等しいといえるだろう。つまり、感情に焦点を当てようとする従来の心理臨床のアプローチは、感情とは遠く離れている彼らとの臨時的出会いの中においては、あまり意味を持たず、身体そのものが、いわば「関係性を育む器」としての意味を持つと考えられる。

それでは自らの本質であるところの外殻としての身体に刺青を入れるという体験は、Aにとってどのような意味を持っていたのか。松田(1972)によると、刺青の本質は異端性にあり、古来日本の刺青は刑罰や差別として行われていたが、16世紀に入り、刺青は「意志的な営為」としての意味を持ち始め、古代の受動性から能動性へと転換され、「心中立て(愛の証し)」や「自己顕示」などの意味を帯びたという。しかし、この従来型の刺青は、受動性と能動性という大きな相違はありつつも、刺青が不可逆的な人格の転換点としての意味を持ち、ある種「個人をある特定のステータスから、別のある特定のステータスへと通過させること」(Van Gennep, 1969)を目的とするイニシエーションとして行われていたという点においては共通していると考えられる。刺青を入れるという行為には、かつて何らかの強い意志や感情、葛藤が関与していたのである。

それではAにとっての刺青も同様の意味を持つのだろうか。現代におけるイニシエーションについて、河合(2000)は、近代社会において共同体で共有された宗教的世界観に保障された制度としてのイニシエーションは消失したため、個人が自分なりのイニシエーションを模索することが必要になったと指摘している。実際学校臨床に携わる

と、現代の子どもたちの様々な行動化は、その「人間の成長において必要な行為の一部」(河合, 2000)としての個別のイニシエーション、超越性を求めての試みと感じられることも多い。西村(2004,2006)は思春期の子どもにとってピアスがイニシエーションの機会のひとつとなりうる論じており、現代の子ども達の中にも、その子どもの意識のありようによっては、ピアスがイニシエーションとしての意味を持つ場合も見受けられる。

しかし、A の場合も含め、ポストモダンの意識を生きている反社会的行動化を示す彼らにとっては、刺青もピアスも、イニシエーションのように人格の決定的な変容をもたらす試練としての意味は持ちえず、あくまでも日常性の枠内に留まることが多い。そこにはイニシエーションに伴う恐れなどの強い感情体験は欠如しており、痛みという身体感覚の次元が強調されるものの、痛みそのものも大きな意味は持たないようである。そのように現代の刺青がイニシエーションとしての意味を持ち得ない証左として、刺青、ピアシングは反復され、ずらりと並ぶピアスを誇らしげに見せる生徒に出会うことは多い。神経症水準であれば、痛みは、自らの身を護るために避けるべきものであるのに対し、ポストモダンの意識をもつ思春期の子ども達の場合、痛みは永続的な変容をもたらさず、それゆえに反復が生じると考えられる。重要なのは表面 *cosmetic* (Kawai,2006) なのである。

それではかつてのようにイニシエーションとしての意味を持ちえない現代の刺青が持つ心理的意味とは何か。ここでA の語りで着目したいのは、それを仲間と一緒に体験している点である。反社会的行動を繰り返す少年達は刺青やピアスを他者とともに入れることが多いが、それは刺青やピアスを入れる痛みを共有し、刺青を入れる者たちの共同体に自らを位置づけ、その他者とのつながりの中にある自身の実感、他者との一体感を一瞬でも確認する営みとしての意味を持つと考えられる。

Kawai(2006)は、ポストモダンの意識を持つ人の

中に、前近代的な神話的な世界、直接的な現実性へのノスタルジアが共存する場合があります、自傷や性的行動化は、その直接的で生な現実には到達したいというノスタルジックで命がけの試みであるという。A やA のグループの少年たちが刺青を同時に入れたということは、このような直接性を特徴とする前近代的な共同体を回復しようとする試みかもしれない。しかし、A らの体験の問題点は、それがイニシエーションに類似の体験を求めているものではあったとしても、それとしては完成しえないという点にある。共同体を求め、再生しようとしても、それは既に失われたものであり、超越ということにはならず、反復が生じるのである。

この刺青体験の背景として、A の派手な行動化の根底にある深い空虚感や無力感のようなものを見過ごすことはできない。それらは内面という形で言語化されることは決してないが、A の「からだ」が如実に伝えていたものである。A のからだは、張りぼてのように大きく見せるものの中身は空っぽで、フワフワと軸が定まらず世界に定位できないイメージであった。そのようなからだを生きているAにとって、痛みは生な現実、生きている実感に触れる契機ともなっている。本来痛みは厳密には一人でしか体験できないものだが、その普遍性ゆえ他者との共有が比較的容易でもある。幼児は重要な大人に痛みを訴え、「イタイイタイのとんでいけ」と痛みを抱えてもらいながら、脅威に満ちた世界に自分の居場所を見出していく。しかし、厳しい環境を生き抜いてきたAには、他者に自らの痛みを抱えられる体験というのが希薄であった。面接場面で、スクールカウンセラーがAの刺青の語りを聴きながら、その刺青を入れる体験の痛みを全身の身体感覚を伴って感じていると、Aは痛みという生の実感に耐えた自らの勇気や力について生き生きと語り、その際のAのからだは、エネルギーが充満し重みのある印象であった。このようにスクールカウンセラーが、自らが生きるからだをクライアントの眼前に差し出し、痛みを

抱える器として関わるプロセスは、空虚感を抱えながら行動化をする少年にとって、世界に関わり、影響を与え生きているという実感、主体感覚が生感される場としての機能を持つと考えられる。

事例2

B が別室にいる折に声をかけ、最近一番はまっていることを聞くと、「走り屋」(改造バイクによる深夜の暴走行為)という。スクールカウンセラーが走りの面白さがどのようなものかに関心を持って聴くと、携帯を取り出し、「これは昨日の走り」と、バイクの暴走音を録音したものを聞かせてくれた。エンジンのふかし方にもコツがあり、その音によって、誰かが分かるのとこと、いくつかのパターンを聞かせてくれた。その暴走音に二人でジッと耳を傾け、その音に身体全体を浸すような時間を過ごすと、B は音を繰り返し聴き、それに合わせて手首を動かす練習を始めた。その時 B が普段では見せないような、真剣で敬虔な表情で、からだも凛と定まったことにスクールカウンセラーはハッとさせられた。そして B は、その録音されたような軽やかでリズムカルな音を出すには細かく手首を動かさねばならず、練習が必要なこと、そのため毎日練習をしていることなどを語った。実際スクールカウンセラーも手首を動かしてみると、とても B のように柔らかに動かすことはできず、<難しいね。すごく練習頑張ったんだろうね>と感心すると、無邪気な笑顔を見せた。他の仲間も合流し、バイクの爆音を皆で聞きながら、美しい暴走音を出す難しさを語り合った。

事例2の考察

暴走行為は自他に対する危険も伴い、警察を含めて厳しい指導の対象として挙げられることが多いが、単なる大人や社会への反抗やスリルの迫りというレベルの問題だけではなく、本当は少年達が暴走行為を通して何を求めているのかという心理的意味について教えてくれた事例である。B に

とって暴走という行動化は、暴走そのものよりも暴走に伴う音の追求がより重要になっている。携帯で音を録音し、繰り返し自分で聞き、人に聞かせるときの B のからだの様子から、暴走行為は単なる憂さ晴らしではなく、B にとって非常に大切なところの作業であり、自己存在の証の確認としての意味を持つことがうかがわれた。また B にとってこの暴走音は日中イライラした時に自分を慰める移行対象としての意味も持つようであった。一見同じように聞こえる暴走音は、少年達の間では、しっかりとそれぞれの個性を持ったものと認識され、その音を互いに確認することで、「誰々は上手」「誰々はまだ音が重い」といった他者理解が繰り返され、また自身や他者の変化もその音の変化から実感として汲み取られていく。音はいわば自分を映し出す「鏡」となり、「からだ」はまた他者と出会う場となるのである。その音の完成度を高めるために、まるで art としての音楽のトレーニングをするかのように、日中も手首の動きを真摯に練習する B の姿は、宗教的な身体的鍛錬・修行の様子をも髣髴とさせるものであった。筆者もその動きを実際からだで体験すると、その難しさに驚きを感じ、その驚きの表現は、内面を表現する言葉ではつながりにくい B との関係性が深まる契機となったと考えられる。また日常は集中力が持たずルールを守ることが困難な B であったが、この音に関しては型の基本を大切に守り、また高い集中力を示したことは、B の持つ可能性を感じさせるものであり、その後多様な行動化をしていく B の理解の基盤となった。このような理解は、B のからだに着目し、またスクールカウンセラーが自身のからだで得られた理解であり、単に暴走行為を止めるという姿勢では分からないものであったと思われる。このように行動化を中心とする子どもと出会う時には、クライアントのからだに着目するだけでなく、スクールカウンセラーの側が自らのからだを通して、その行動化の体験を生き生きとイメージするところのプロセスがクライ

エント理解を深める上で重要になると考えられる。

6. おわりに

教育臨床の現場で反社会的行動という行動化が前景化している少年たちと出会うとき、人はどうしても表面的な行動の華々しさに目を引かれてしまいがちである。スクールカウンセラーとしても、事態の深刻さに早急に何か原因を見つけ対策を講じなければという学校からの切実な要請に直面し、自らの専門性が問われることになる。そのとき、現代社会は『「関係喪失」の病』（河合、2001）に多くの人が苦しんでいるという指摘があるように、自分という内面のなさを特徴し「ポストモダンの意識」（Kawai, 2002）をもつ反社会的な行動化を示す少年達は、その関係性の喪失という時代性の苦しみを先鋭に映し出しながら生きているのではないかという視点を持つことは、全体状況を見極めるうえで意義深いと思われる。そしてそのような行動レベルで表現されている彼らの生きにくさを、心理臨床の関わりの中で彼らが生きている「からだ」という観点から焦点を当てるとき、荒々しい言葉や行動の背景に、他者や世界とのつながりを求める彼らの息遣いをより鮮明に感じることができる。また臨床の場におけるからだの一見些細な変化に目を留め、そのからだを通しての手ごたえを一つ一つ大切にしていくことが、従来の内面性を前提とする心理療法を得意とする心理臨床家にとっては、感情や内面にこだわり過ぎて、新たな意識のありようの少年たちとの関係で膠着状況に陥ることを防ぐことにもつながるだろう。そして同時に、からだへの着目は、言葉とは裏腹に反復される行動化に振り回されず、安定して心理臨床的関わりを続けていく上での支えとなると考えられる。

このように、「からだ」という心理臨床学の視座は、行動化を繰り返す子どもたちと出会うとき、非常に有意義であり、スクールカウンセラーはここだけでなく、その子どもが生きているからだ

に常に目を向け、全体としてのありように思いをはせることが必要である。スクールカウンセラーが、常にクライアントだけでなく自らのからだをイメージとしてとらえ、向き合う時、身体は「関係性を育む器」としての意味を持ち、行動化の背景にある心理学的意味は自ずと見えてくると考えられる。

また本論では紙数の関係で扱わなかったが、そのような「からだ」を通して見えてきた理解を、教育臨床の中で教員や保護者と共有することで、行動化を繰り返す少年を支える基盤を作ることができると考えられる。今回の考察は一つの試論であり、今後も教育臨床実践の中で、行動化の背景にある身体性について考察を深めていきたい。

【文献】

- 東千冬 (2001) : 非行生徒との取り組みの実際 臨床心理学, 1(2), 189-195.
- 廣井いずみ (2000) : 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究, 18(2), 129-138.
- 岩宮恵子 (2000) : 思春期のイニシエーション 河合隼雄 (編) 心理療法1 心理療法とイニシエーション 岩波書店 pp105-150.
- 岩宮恵子 (2003) : 思春期における“からだ” 臨床心理学, 3(1), 13-19.
- Jung C.G. (1988) : Nietzsche's Zarathustra: Note of the seminar given in 1934-1939. Princeton: Princeton University Press.
- 門本泉 (2006) : 非行少年に見られる自傷行為の理解 心理臨床学研究, 24(1), 34-43.
- 河合隼雄 (2000) : イニシエーションと現代 河合隼雄 (編) 心理療法1 心理療法とイニシエーション 岩波書店 pp1-18.
- 河合隼雄 (2001) : 「物語る」ことの意義 河合隼雄 (編) 心理療法2 心理療法と物語 岩波書店 pp1-19.
- 河合隼雄 (2003) : 心身問題と心理療法 臨床心理学, 3(1), 3-6.

- Kawai T (2006) : Postmodern consciousness in psychotherapy. *Journal of Analytical Psychology*, 51(3), 437-450.
- 桑原知子 (1999) : 教室で生かすカウンセリングマインド 日本評論社
- 松田修 (1972) : 刺青・性・死—逆光の日本美 平凡社
- 村山正治・滝口俊子 (編) (2007) : 事例に学ぶスクールカウンセリングの実際 創元社
- 西村則昭 (2006) : スクールカウンセラー印象記—行動化する生徒との関わりを中心に 仁愛大学研究紀要, 4, 101-115.
- 西村喜文 (2006) : 非行傾向生徒に対するグループ・コラージュの試み 心理臨床学研究, 24(3), 269-279.
- 十河真人・末松弘行 (1989) : 非行少年における心身症—高校生との比較 心身医学, 29(7), 623-631.
- Van Gennep A. (1969): *Les rites de passage*. Paris: Mouton. 綾部恒夫・綾部裕子 (訳) (1977) : 通過儀礼 弘文堂